

第18回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

クラスメイト

大西 賢・東京都日野市

小学校四年生のときに「衛生検査」というものがおこなわれるようになった。毎日、一時間目の前に、生徒たちは両手を机の上に出す。爪をきちんと切つてあるかどうか。そしてもう一つ。ハンカチを出す。きちんと持ち歩いているかどうか、だ。この「ハンカチ検査」が重要だった。

私の学校だけなのかもしれないが、当時の小学生男子はあまり行儀が良くなかった。手を洗うと当然、手は濡れるのだが、その濡れた手をどこで拭くかという点、「ズボンで拭く」「シャツで拭く」かに分かれた。ハンカチを持ち歩く男子はいなかったのだ。ひどい生徒になると、掃除の時間に雑巾がけで濡れた手を教室のカーテンで拭く者もいた。私もその「ひどい生徒」のうちの一人だった。男子たちのこの行儀の悪さに、女子たちは顔をしかめた。学級委員の女子生徒が、「先生、また男子が濡れた手を！」などと報告するのだが、男子たちはその行為をやめなかった。

まだテレビゲームが普及する前の昭和の日本である。「子供はどろんこになるまで外で遊んできなさい」などと親から「指導」されるような時代だった。ある日、外が真つ暗になるまで公園で友達と遊んでいたことがある。心配した母が叱りつけたのだが、父は、「男の子はお母さんを心配させるぐらいでちょうどいいんだ」などと笑っていた。そういう時代であり、そういう地域だった。だから、ハンカチを持ち歩くという男子はいなかった。裕福な男子も成績優秀の男子も、みんな濡れた手はシャツやズボンで拭いていた。

そんなある日、朝礼の時間に、男子生徒全員に新品のハンカチが配られた。先生が、「サオリさんから男子への贈り物です」と言った。

サオリさんは大人しくて目立たない女子生徒だった。男子の不衛生な行為にそれほど怒っている気配はなく、あまり自分の意見を表明しないタイプだったため、このハンカチの配布は男子を驚かせた。

だが、サオリさんがくれたハンカチを、誰も持ち歩こうとしなかった。粗暴さや不潔さを競うような小学生男子の世界で、女子がくれたハンカチを持ち歩くのは軟弱さの象徴のように思えた。多くの男子は女子生徒からプレゼントをもらうのは初めてであり、妙に気になったのだが、男子みんながあまりにも意識しすぎて、使おうとしなかった。

「そういえば、最近、サオリさん学校に来ないね」誰かがそう言ったので、ようやく気付いた。たまたまだろう、とあまり気にしなかったのだが、一週間経つても二週間経つても、サオリさんは学校に来なかった。

「サオリさんは別の小学校に転校しました。もう皆さんとは会えません」担任の先生から朝礼でそんなことを言われて、男子たちはびっくりした。

サオリさんは重度のぜんそくをもっていった。空気の悪い東京でこれ以上生活はできず、環境のいい東北に引っ越したのだった。

十歳である。健康で当たり前だと思っていたが、実際は同じ年で命を保つために住まいを変えなければならぬ人もいたのだ。

男子たちはその日、去ってしまったクラスメイト、サオリさんのことを話した。彼女が勉強が得意だったのか、誰も知らなかった。音楽や図工が好きだったのかどうか、それもみんな知らなかった。

「そういえば、体育の時間、いつも見学していたような気がする」男子の一人がそんなことをつぶやいた。

派手な言動を好まず、リーダーシップや責任といったものからも距離を置いていた彼女をもっと大切にしておけば良かった、と男子たちは後悔した。

「俺たちがハンカチを持ち歩かなかったから、この学校で暮らせなかったのかな」男子の一人が言った。

空気のいい東北で、という先生の言葉が、まるで自分たちの不衛生な振る舞いをやんわりと非難しているようで、やけにこたえた。

翌日から男子たちはハンカチで手を拭くようになった。誰もサオリさんのことを口にしなかったが、ハンカチを持ち歩いていることが、彼女に思いを馳せている証拠だった。

クラスメイトをもっと大切にしよう。

それまで行儀の悪かった男子たちは、風紀を乱すことを慎むようになった。それを見てサオリさんと仲の良かった女子が言った。

「あたし、サオリちゃんと一緒にハンカチを買いに行ったけど、すごく楽しそうに選んでいたよ。男子みんなが好きなんだって」